vol.10

日本農業遺産認定

丹波篠山の黒大豆栽培・300年の歴史

「農業の中でまもられる生きものたち」ってどういうこと？

農業遺産認定の審査基準の中に「農業生物多様性：農業の営みによっていろいろな生き物が守られていること」というものがあります。農業をされていない方には何を意味しているのか、なかなかイメージがつきにくいかもしれません。今回は「もしも、丹波篠山に田んぼがなかったら生き物たちはどうなっているか？」を考えてみます。

田んぼでは春先に田植えのために水を入れますが、これがなくなると5～6月ごろに産卵するアマガエルがまずはじめにいなくなるでしょう。次に、そのカエルを食べるヘビやサギも姿を消します。稲がありませんので、バッタやクモなどの昆虫も激減してしまい、毎年飛んでくるはずのツバメもこなくなります。これだけではありません。田んぼに水を入れるための「水路」や「ため池」も不要になります。そうなると、ため池に張り出した樹上で産卵するモリアオガエルや、川よりも流れが緩やかな水路にすむメダカやドジョウも姿を消してしまうでしょう。

このように、丹波篠山に田んぼがあって、そこでお米が作られるからこそ、おいしいご飯が食べられるだけでなく、いろいろな生き物も暮らせるのです。丹波篠山では、水不足から多くのため池が造られたことで、珍しい湿地性植物のサギソウやオグラコウホネなども生きることができます。こうした絶滅が危惧（きぐ）される植物が、周辺地域に比べて多いことが農業遺産への申請を通じて分かりました。ただ、黒大豆の畑と生き物の関係はまだ分からないことも多く、これから新しい発見があるかもしれません。皆さんも、黒大豆の畑にどのような生き物がいるかぜひ観察してみてください。

樹上に産み付けられたモリアオガルの卵

田んぼの周りでトノサマガエルを食べるシマヘビ